令和３年度富山県水墨美術館運営委員会　議事抄録

令和３年１１月１日　富山県水墨美術館映像ホール（一部リモート）

出席　　池田嘉津弘委員、小野美恵子委員、木下晶委員、西藤哲夫委員、二野井朋委員、
　　畑中節子委員、福永治委員、米澤陽子委員、米田大樹委員
　　［リモート］
　　三宮千佳委員、山下裕二委員

欠席　　安河内眞美委員、米田大樹委員

委員１２名中出席１０名（うちリモート２名）、欠席２名（委任状あり）

おもな発言

- 水墨美術館は基本的理念にあるように自然と一体化した魅力がある。桜だけではなく、四季折々の企画を工夫して、アンケートでは４０～６０代の来館者が多いようだが、そうした年代を対象とした事業などにもさらに取り組んでほしい（A 委員）
- 小村雪岱展はコロナ禍で集客に厳しいところもあったようだが、東京と地方では集客に差があるようだ。来年度は福富コレクション展も開催される。アンケート等を見ていると首都圏と比べ若い世代が少ないようなので、そうした客層へ向けたアピールを考えていってもらいたい（B 委員）
- コロナ禍による展覧会の延期など、ご苦労されながら取り組んでおられる。突然の休館は、現場には大変こたえるものだ。美術館としてはジレンマもあるリモートなどの活動にもチャレンジしているが、そうしたことをもっとアピールして、コロナ禍中で美術館は何に取り組んでいるのかを皆さんに知っていただくことも大事だと思う。この美術館は真面目で、年間の展覧会の数が多い。会期と会期の間を空けるなど、施設が老朽化していく状況の中で、「構え」を少し変えていくことも必要ではないか（C 委員）
- まさかの休館はガッカリだった。他の美術館を含め情報発信の大事さを痛感。コロナ禍で仕方がないのだが、その中でよくやっていたと思う。篁牛人展はすばらしかったので、東京展で多くの人に見てほしい。（D 委員）
- ガイドをしてもらいながら観ていると、やはりわかりやすい。SNS への取り組みで、水美に言及してもらったものには積極的に「イイネ」を付けて広がりをはかっていってはどうか。子どもが親に「行きたい」というような企画があればいいと思う（E 委員）
- 篁牛人展のように郷土出身作家を取り上げていってほしい。もうひとつ、「水墨」にこだわるのは当然なのだが、現在では水墨で描いている人は少ない。ポスターなどに選ぶ作品によっては「また墨の作品か」と思われるので、一考願いたい。（F 委員）
- 中高生にみてもらうための仕掛けがあるといいと思う。企画展の内容で、絵画が主体というのは理解しているが、収蔵作品にもいいものがあるので工芸も取り上げていただけると、バリエーションが増えメリハリが出てよい。富山大学にも青銅器のコレクションがあるので取り上げてみてはどうか。ツイッターなどで大学生のアイデアもとりい

れるような工夫もあるとよいと思う。（G 委員）

- 子どもたちの感性を育てるには、学校の中だけではなく、本物の作品にふれることが重要。美術館をどう教育の場に取り入れていくか。この素敵な環境を子どもたちのために活かしたい。指導要領にも「伝統文化に親しむ」ことは謳われており、水墨の授業も講師を招いて行われている。機会があれば、子どもたちにも墨の文化を広めていける。文科省では中学校の「部活動の社会教育化」といった課題を挙げており、土日に学校で活動しないとなると「場所」と「人」が必要だが、美術館は場所を提供できるのではないか。展覧会以外のワークショップや講演会などの活動の PR にも力を入れていってほしい。（H 委員）
- 「水墨」というと白黒だけで若者は興味をひかないところもあるが、いろいろな視点で企画に取り組んでいる。都会の美術館は混んでいる。水墨美術館は好きな場所で、ゆっくり見ることができるのはありがたい。お茶室、芝生の広がる庭、桜が一本ある、すごい贅沢。中高年には憩いの場所、リフレッシュできる場所ですばらしい。来るたびに新しい世界を見せられて「よかったな」と思って帰れる場所。これはぜひ、このまま活かしてもらい、メインは中高年の方に「新しい世界を見られる」、そういう機会を提供してもらえれば。以前に「お宝拝見」などの企画もあったが、普段こういう場所に来ない人にも来る機会になった。（I 委員）
- 日本のことを世界に発信する美術館と謳っておられる。「発見」があったほうが面白い。子どもたちや若者はいわば「異邦人」と思ってもらえれば。英語でもどんどん発信していってもらえれば、高校生は外国人に説明するための教材として活かせるかもしれない。「富山は何もないところ」ではなく、水墨を、富山を、自然を、富山の薬を発信していける、そういう子どもたちに育っていってほしい。（J 委員）